

1. めざす学校像

建学の精神	「人はみな神の氏子である」という金光教祖の広大かつ自然な教えにもとづき、すべての人に与えられている個性を生かす教育の場を願う
教育理念	「人間平等」「個性尊重」「心を育てる」教育の実践
教育スローガン	「文武両道の心豊かな人間を育む金光大阪」 <ul style="list-style-type: none">・ 文武両道の共学進学校として、地域から一定の評価を受けている現状から、さらに全教職員が組織的な努力を重ね、その評価を一層確固たるものにする。・ 日々の教育実践において学習指導、部活動指導を行うに先立ち、生徒指導の充実を図る。その実現のため、教職員は弛まない自己研鑽に努める。

2. 中期的目標

1. 次代を生き抜く確かな学力の育成 (1) 学習成果が、生徒一人ひとりの進路の展望につながる授業を推進する。 ア. 自らの適性の把握と確かな人生観・職業観を持たせ、日常の教科学習への興味・関心を高める。 イ. 学習意欲の高い生徒に対して、さらに学力を伸ばす工夫をするとともに、到達度の低い生徒に対して補習等を実施し、日々の授業がわかるものにしていく。 ウ. 授業だけでなく、自らの意志で創意工夫をしながら学び続ける姿勢を養う。 ※生徒アンケート教科学習に対する「興味・関心」、「授業理解」、「向上への意欲」の各肯定回答を順次引き上げ、平成 28 年度にはそれぞれ 80%以上にする。
2. 教員の自己研鑽の推進 (1) 各種研修を通して教員としての力量向上を図る。 ア. 校内および関西金光学園法人レベルでの研修や校外研修を通して、教員それぞれの指導力の向上を図る。 ※校外教員研修に原則全員の教員が参加し授業力向上に努め、平成 28 年度には生徒アンケート「授業の工夫」「教材の工夫」についての肯定回答を 85%以上にする。
3. 豊かな人間性の育成 (1) 互いの個性を認め、尊重しあい、一層安心できる学校生活を確立する。 建学の精神に基づき、教育の主軸として、「人間平等」「個性尊重」「心を育てる」を掲げ、学校教育全般、とりわけ宗教情操教育を通じて、互いの個性を認め、尊重しあう人間関係を作る。 ア. 全教員が生徒に対し、いじめ問題、差別問題を一人ひとりの問題と考えさせ、その解決を目指す力を育成する。 イ. 集団の中での人格形成の場としての部活動、課外活動への積極的な参加をうながす。 ※いじめ、差別事案に対して初期段階で迅速に対応し深刻化を防止する。 新入生の部活動加入率を 80%以上としそれを維持していく。
4. 基本的生活習慣の確立 (1) 心身ともに生涯にわたって健やかに生きるための生活習慣を確立していく。 ア. 「生活習慣力」「時間管理力」「計画実行力」「経験活用力」を身につけさせる。 イ. 遅刻をなくし、欠席がちな生徒に対し手厚い指導を行う。 ※生徒アンケート「毎日子習復習をしている」生徒を平成 27 年度に 66% (2/3) 以上とし、平成 28 年度には 75% (3/4) 以上とする。

【自己評価アンケートの結果と分析・学校評価委員会からの意見】

自己評価アンケートの結果と分析	学校評価委員会からの意見
<p>○教員による自己評価は年1回実施しており、より良い教育を提供できるよう教育活動の成果を検証し、学校運営の改善と発展を目指すものである。</p> <p>【肯定意見が高かった項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・朝礼時における「朝の祈り」が厳粛な雰囲気の中で行われている。(100%) ・教会参拝や感謝祭等の行事が生徒にとって「心を育てる教育」に有効なものとなっていると確信している(100%) ・学習意欲の高い生徒に対して、さらに伸ばす工夫をしている。(100%) ・生徒の人権を尊重し、人権侵害や差別意識の助長を許さない学園づくりを進めている。(100%) ・生徒の健康状態を把握することに努め、衛生や学習環境の安全についても配慮している。(100%) ・生徒のプライバシーを尊重しており、個人情報の管理にもマニュアルを定めるなど特段の配慮をしている。(100%) <p>【肯定意見が低かった項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・校内外の研修に参加して、授業方法等について検討する機会を持っている。(91.1%) <p>【分析】</p> <p>教員による自己評価はほとんどの項目が95%以上と肯定感が高く、各人は日々真摯に教育活動に取り組んでいると認識している。自己研鑽に係わる項目については、他項目に比べポイントが低かったが、はじめて90%を超え改善されつつある。</p> <p>○生徒アンケートは年2回実施しており、授業担当者にとって授業を改善するデータとするとともに、生徒自身が授業への取り組み方、学習状況を振り返るものである。</p> <p>【肯定意見が高かった項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・先生はわかりやすく話していたか。 中学 93.0% 高1 80.3% 高2 90.3% 高3 88.4% ・生徒の質問には、正しくきちんと回答してくれたか。 中学 92.2% 高1 80.9% 高2 91.0% 高3 89.0% <p>【肯定意見が低かった項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いつも予習と復習をきちんとしていたか。 中学 42.0% 高1 39.4% 高2 54.9% 高3 61.5% <p>【分析】</p> <p>生徒アンケートから、ほとんどの教授法、生徒対応についての項目で8割以上の肯定的な回答を得られた。しかし、自らの学習姿勢に関する項目では、肯定的な回答が低く、毎年その改善が課題となっている。即効性のある解決法を見出しにくい項目であるが、地道であっても学習習慣が身につく指導を継続していく必要がある。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・グラウンドの全面人工芝生化等校内施設拡充教育環境の充実が図られ有難い。今後は、生徒の実態に即した使用法を検討してほしい。 ・生徒への指導等で多忙な中、研修会への参加は難しいと思われるが、最終的には生徒へ還元されるものであるので、可能な限り参加してほしい。 ・総体的に生徒のアンケート結果は良好である。教師によって差が出ることはしかたない面もあるが、改善に努めてほしい。 ・昨年より向上してきたが、予習・復習については、まだ満足のできる数値とはなっていない。毎日、全ての科目の予習・復習をすることは難しいが、更なる改善をお願いしたい。

3. 本年度の取組内容及び自己評価

中 期 的 目 標	今年度の 重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
<p>1. 次代を生き抜く確かな学力の育成</p>	<p>学習成果が、生徒一人ひとりの進路の展望につながる授業を推進する。</p> <p>ア. 確かな人生観・職業観に基づく学習への興味・関心の醸成。</p> <p>イ. 個々の学習状況に応じた指導の工夫。</p> <p>ウ. 自学自習の習慣の確立。</p>	<p>ア. 進路総合学習のみならず、二者懇談等学校教育活動全般に亘って、自らの適性の把握と確かな人生観・職業観を持たせ、日常の教科学習への興味・関心を高める。</p> <p>イ. 学習意欲の高い生徒に対して、早朝・放課後の進学講習を実施し、さらに学力を伸ばしていく。また、到達度の低い生徒に対して従来の高校での補習に加え、中学校でも考査前補習を行い、日々の授業をわかるものにしていく。</p> <p>ウ. 自らの意志で創意工夫をしながら学び続ける姿勢を養うため、自習室をはじめ、校内での自学自習環境を整える。さらに、「学習タイム」を新設し、自学の一助としていく。</p>	<p>ア. 生徒アンケート各教科に対する「興味・関心」の項目において肯定の回答が全科目平均 75%以上（平成 26 年 67%）</p> <p>イ. 生徒アンケート「授業の理解」に関する項目の肯定回答が全科目平均 80%以上（平成 26 年度 77%）</p> <p>ウ. 生徒アンケート「向上への意欲」項目の肯定回答 70%以上（平成 26 年度 58%）</p>	<p>ア. 進路総合学習は年間計画通り実施でき、引き続き生徒が進路選択を考える上で有効に機能している。その結果として日々の学習への興味・関心に至っているのは全体で 67%→70%と目標値に向け前進している。目標値達成に向け、継続した指導を行っていきたい。（△）</p> <p>イ. 進学講習、考査前補習はほぼ計画通り実施。生徒の授業理解度も目標値 80%には少し届かなかったが、昨年より微増し 78%と概ね達成できた。次年度も継続した指導にあたり、目標値 80%を超えたい。（○）</p> <p>ウ. 「学習タイム」の新設は、特に部活動生の学習時間の確保と家庭学習への導入として有効に機能している。自習施設は学習施設として定着しており、早朝から放課後まで積極的に活用されている。学習活動の原動力となる「向上への意欲」も 58%→61%と目標値には未だ到達していないものの上昇傾向にあり、更なる向上に努めたい。（△）</p>
<p>2. 教員の自己研鑽の推進</p>	<p>各種研修を通して教員としての力量向上を図る。</p> <p>ア. 指導力向上のための研修開催。</p> <p>イ. 教科教授法の多角的な研究の推進。</p>	<p>ア. 校内および関西金光学園法人レベルでの研修を年 2 回以上開催し、教員それぞれの指導力の向上を図る。</p> <p>イ. 公私各教育研究会（所）が実施する校外研修に積極的に参加し、教科教授法の多角的な研究を行いより質の高い授業を展開する。</p>	<p>ア. 生徒アンケート「授業の工夫」、「話し方の良否」、「教材の工夫」に関する項目の肯定回答それぞれ 85%以上（平成 26 年度 80%、82%、80%）</p> <p>イ. 教科教授法に関する校外研修への参加数、延べ 30 人以上。（平成 26 年度 14 人）</p>	<p>ア. 法人主催の学園研修は新任研修と若手教員対象研修の 2 回開催した。共に教員の力量を高めるものとなり、系列校教員間の話し合いも有意義なものとなっている。教授法の向上も年々図られ各項目において、到達目標 85%に対し各 84%、86%、86%と 3 項目中 2 項目で達成、満足いく結果となった。次年度も引き続き目標達成に向け、工夫・改善を図りたい。（◎、○）</p> <p>イ. 外部団体主催教員セミナー参加者は、44 人と目標値を達成できた。次年度は延 50 人以上の参加を目指すとともに、教科担当間での校内研修の充実を図りたい。（◎）</p>

<p>3. 豊かな人間性の育成</p>	<p>互いの個性を認め、尊重しあい、一層安心できる学校生活を確立する。</p> <p>ア. 人権意識の向上に向けた指導体制の整備</p> <p>イ. 部活動を通じての人格形成</p>	<p>建学の精神に基づき、教育の主軸として、「人間平等」「個性尊重」「心を育てる」を掲げ、学校教育全般、とりわけ宗教情操教育を通じて、互いの個性を認め、尊重しあう人間関係を作る。</p> <p>ア. 年度初めの人権教育推進委員会において生徒への指導計画を作成。人権教育推進委員会やいじめ防止対策委員会を定期的に開催し、生徒にいじめ問題、差別問題を一人ひとりの問題と考えさせ、その解決を目指す力を育成する。</p> <p>イ. 部活動紹介、仮入部期間を設定し、仲間との連携、集団の中での個人の役割、重要性を学ぶ場としての部活動をはじめとする課外活動への積極的な参加を新入生にうながす。</p>	<p>ア. いじめ・差別事案に対して初期段階で迅速に対応し深刻化を防止する。</p> <p>「教師への相談のしやすさ」についての肯定回答 80%以上 (平成 26 年度 78%)</p> <p>イ. 新入生部活動加入率 80%以上 (平成 26 年度 82%)</p>	<p>ア. いじめ・差別事案については初期段階で対応し、深刻化する前に指導できた。特にいじめ問題については、中高生年代においては、いつでも、誰にでも起こりうる問題であるとの教師間での共通認識の持つことが大切である。引き続き生徒に指導を行うと共に、日々生徒の変化を敏感に感じ取る力を養っていききたい。(○)</p> <p>また、「教師への相談のしやすさ」は 79%で 2 年連続の微増により、概ね目標値に達した。今後もより一層生徒が相談しやすい雰囲気作りを進めていききたい。(○)</p> <p>イ. 本校の部活動は、特に新入生において集団での連携、帰属意識の向上等、教育的に好ましい活動の場として機能している。その加入率は昨年度より減少したものの 79%で、ほぼ目標値となった。次年度においても、入学当初の時点で部活動の有効性について積極的に伝えていききたい。(○)</p>
<p>4. 基本的な生活習慣の確立</p>	<p>心身ともに生涯にわたって健やかに生きるための生活習慣を確立していく。</p> <p>ア. 自己管理能力向上にむけた取組</p> <p>イ. 基本的な生活習慣の確立</p>	<p>ア. セルフ手帳を活用し、「生活習慣力」「時間管理能力」「計画実行力」「経験活用力」を身につけさせ、日常的に生徒との面談を行い学習状況の点検を行う。</p> <p>イ. 遅刻生徒にはその日の放課後に指導を行い、翌日 30 分前登校を促しその改善を確認する。また、欠席がちな生徒に対し、家庭訪問を含め、早期に家庭との連携、対応を図る。</p>	<p>ア. 生徒アンケート「予習復習を毎日していた」という回答 60%以上 (平成 26 年度 49%)</p> <p>イ. 遅刻数(通院等を除く) 対前年減少率 20%以上。(平成 26 年度対前年減少率±0%)</p>	<p>ア. 「予習復習を毎日していた」生徒の割合は昨年度より改善されたものの本年度も 52%と目標値を下回った。毎日全科目の予習復習は現実難しいが、6 割以上達成を目指したい。面談等を通じて学習活動の点検を行いたい。</p> <p>また、セルフ手帳は現状のものでも生徒に基本的な生活習慣を確立させる上で効果的に機能しているが、その内容構成の再検討し、更なる進化を目指したい。(△)</p> <p>イ. 遅刻数の対前年減少率 15%。昨年度は下げ止まりの感があったが、教員一体となった指導の成果で再び減少させることができた。単年度減少率 20%は達成できなかったものの、2 カ年での減少率 30%は評価したい。今後も継続した指導を行っていききたい。(○)</p>